

## ドイツ語の発音 II.

### 促音便

ウィルウェーバー・エン

ドイツ語を学習する時、日本語にない数々の発音、例えば母音では ä, ü, ö, o, u, e, 子音では l, n, r, pf, ch, sch があって、これらを完全に身につけるには努力を要する。ドイツ語入門の第一歩として、一応これらの発音は、種々の単語が例にあげられて、教科書の始めの数頁にまとめられている。然し乍ら、日本語に頻繁に出て来る促音についてはふれることなく終る。そして促音は外国語を発音する時にも当然の如く使われている。ドイツ語にも促音があるのであろうか。促音のドイツ語訳は見当らない。それに近い発音があることは事実であるが、日本語の促音とは区別できるので、この点について考えてみたい。

日本語を使う時促音は頻繁に出て来て、発音の重要な構成要素の一つである。例えば促音を含む名詞、副詞、形容詞（出発、屈服、活気、すっかり、やっと、ゆっくり、もっと、立派な）や促音便を持つ動詞（待っている、立っている、買って来る、洗ってほしい）等がある。日本語から促音を除けば言葉としてその役割は果しにくくなるであろう。

促音のドイツ語訳をドイツ人にたずねると、Doppeltkonsonanten（重子音、複子音）を提案するが、これらが日本語の促音に当るかどうかは分らないという。その理由は、日本語の文字が子音の発音を表わす場合は「ン」だけであって、他は子音と母音との組合わせた有声音であるから、発音が強くなるのではないかという。両者の発音を比較すると、促音とドイツ語の重、複子音とは異なることに気がつく。その最も良い証拠はドイツ人に促音のある日本語を発音させてみることである。「待って下さい、持って来て下さい」等を、ドイツ人は「マテクダサイ」、「モテキテクダサイ」に近く発音する。日本人の使う促音には注意が向かないようである。そこで「待って」「持って」と促音の部を強調して訂正すると、わざとらしく大げさに音をつまらせて促音にする。そして、まるで軍隊のようだ、という。あまり良い感じを持たぬようであり、促音を発音することをためらうようである。ドイツ語を学習する時は、この事実を重要視すべきである。即ち逆に促音をドイツ語に入れてはならないのである。促音を使うとドイツ語らしく聞えない。ドイツ語ばかりでなく、筆者の知る限りの英語、仏語にも促音はないようである。但し詩の朗読、演劇のせりふ等では促音に近い発音を聞くことがある。例えば Das Hexenlied(魔女の歌)の Prior が Medardus の死の床に灯をふりかざしてかけつける時の“Die Tür war offen.”の offen は明らかにオフンと聞える。又オペラの Die Zauberflöte (魔笛)の Papageno の歌う“Ein Vogelfänger bin ich ja, stets lustig, heisa, hopsassa!”の hopsassa はホプサッサと聞える。この他前述の軍隊等における号令、その他のかけ声等の場合がある。それは r の発音をこのような場合にはっきりと巻舌の発音にするのに似ている。hatte ハッテ, Gott ゴット, ab アップ, Tisch ティッシュ, Deutsch ドイッチ, Stadt シュタット, Katze カッツェ, waschen ヴッシュェン, essen エッセン, backen バッケン, Kopf コップフ,

## ドイツ語の発音 II.

Wappen ヲッペン, hoffen ホッフエン, lachen ラッヘン, sechs ゼックス等と促音を使って発音し勝ちであるが、厳しくいましめねばならない。音標文字においても、促音を表現する記号はない。Bett は (bet) であり, backen は (bakən), hoffen は (hofən) と記されている。然しドイツ語を相当深く学習した時でも、促音を使わぬよう注意されたことは聞かない。

Doppeltkonsonanten (重子音) には ll, mm, nn も含まれることになる。これは促音にはならない。それどころか、日本人は alle をアレ, komsnen をコメン, kennen をケネンと l, m, n と同じ発音にする傾向がある。ドイツ語に馴れた感じを出そうとする時特にこのように発音される。然しこれはあくまでアルレ, コンメン, ケネンである。ドイツ人が時にはアレ, コメン, ケネンと発音しているように聞える場合があっても注意して聞くと ll, mm, nn を言外にひびかせていることが分る。

日本語の促音便は奈良時代から既にあり、平安中期頃完成されたという。それは無表記なので分らないが、発音されていたようである。そして現代の口語体に日本語が移り変わってゆくにつれて、促音はますます多くなるようである。日本人は促音が好きなのであろうか。

日本の民族性を、その気候風土に影響されて、長年の間に形成されたものという観点から考えてみたい。日本人自身の中から湧き出るように踊り出せるリズムは阿波踊りのそれである。ワルツのような3拍子も、スウィングの無い4拍子も日本人にはよそゆきのものである。それは酒類に酔った時に最も真実に表現されるのである。この阿波踊りのリズムは促音と何か相通ずるものがあるように思われる。何故、阿波踊りのリズムが好まれるのであろうか。日本列島の主要部は温帯性気候である。熱帯のようにジャングルや砂漠の形成される烈しい暑さも無ければ、大陸でもなく、又北欧のような恐ろしい寒さもない。といっても日本の夏は蒸し暑い。連日の暑さは耐え難く、もはや耐えられぬであろうと思われる頃、立秋や盆がきて、突如として冷やりとした朝夕が一と時おとずれる。残暑がきびしくても精神的に一と息つく。冬の寒さは、北欧のように暖房を完全にせねばならない程きびしくない。それだけに不完全な暖房で寒さにふるえなければならぬ。生かさず殺さずの気候と言いたい。そして四季は規則正しく3カ月毎に移り変わってゆく。欧州のように、ドイツ人が夏と称する暖かい時季と、寒い冬の二つの季節には分けられないのであって、生活は3カ月毎の衣食住の移り変りに一年中を、そして一生涯を追い立てられてゆく。これは日本民族を南方民族のようにのんびりとさせることなく、又北欧民族のように重厚で哲学させることもなく、その中道をゆき、勤勉で骨身惜しまず、阿波踊りのリズムが性に合う気質を形成したのではないか。

このようにして日本語は世のスピードアップと共にますます促音を増すようである。「ハイッ」と娘さんが返事をする。中々歯切れよく、かいがいしくひびく。ところがドイツ人はこれをひどく気にかける。号令のように聞えて、切角の妙齡の娘さんが台無しになるという。ラジオ体操の号令がひびくと、神経をかき立てられるようで、「オイッ、オイッ」とまねておどけてまぎらせようとする。日本全土を掩う歌は「ワッターはアナッター スッキーヨ、 スッキーダッカーラ オッコレナイ」、 「オットコ タッターダイマ ヨッメサン ボッシュューチャー、 シツズカナクッラシはイッカガデッスー」と流して行く。童謡にまでもおよび、「カッモッメーのスウィヘッサイサン」、「アッメ アッメ フッレ フッレ、 カッアサッが一」と幼児の耳に促音が、阿波踊りのスウィングのリズムと共に叩き

## ドイツ語の発音 II.

こまれてゆく。

日本列島が温帯性の気候で島国である限り、日本民族は阿波踊りのリズムに魂をゆさぶられ、骨身惜しまず行動するであろう。そして言葉に活気を与え、歌謡曲に心情を訴えるために、ゆりかごから墓場まで促音を *würzen* (香味を与え食欲を増す) してゆくことであろう。然しこれと同時に、促音を自覚してドイツ語に入れぬよう注意するべきである。

助言を賜りました村上フミ様に感謝の意を表します。

**引用文献**：日本語の歴史：(平凡社) 四、移りゆく古代語、第一章古代語の残照、第二章音便の発生

ドイツ語の発音：WILLWEBER, En 大手前女子大学論集6号 1972

リズム：WILLWEBER, En 大手前女子大学論集7号 1973

静かな憩：WILLWEBER, En 大手前女子大学論集8号 1974

Das Hexenlied: von WILDENBRUCH, Ernst

Die Zauberflöte: MOZART, Wolfgang Amadeus